

令和 6 年 6 月 6 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00546

研究課題名（和文）びん語びん東区方言群音韻史の総合的研究

研究課題名（英文）A comprehensive study on the phonological history of Eastern Min

研究代表者

秋谷 裕幸（AKITANI, HIROYUKI）

愛媛大学・法文学部・教授

研究者番号：10263964

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：現代びん東区方言群のデータに基づくびん東区方言群音韻史の研究を行った。「総合的研究」と研究課題名にあるように、最も低いレベルにおける微視的音韻史研究、その対極にあるびん語音韻史全体を視野に入れた巨視的音韻史研究、地方韻書を駆使した研究、語彙史と音韻史の融合を目指した身体名称語の歴史的研究などを行った。当初の予定では、浙江省慈溪市に分布する「燕話」の調査を実施することになっていたが、諸般の事情から実施することができなかった。また、研究期間内に著書『びん東区音韻史研究』の初稿を完成させることができなかったことを遺憾とする。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義。びん東区方言音韻史について、現在実施可能な多くのタイプの研究方法（微視的音韻史、巨視的音韻史、語彙史との融合、地方韻書の活用）を具体的な論文によって提示したこと。またびん東区方言祖語の概要を提示したこと。

社会的意義。他の圧倒的多数の中国語方言と同様、びん東区諸方言も目下急速に失われつつある。そのびん東区諸方言のデータを学術的に整理・保存することは、言語文化継承という点から社会的意義があると考えられる。また研究成果の発表を通じて、福建省の言語文化に対する社会の関心を高めることも期待される。

研究成果の概要（英文）：The phonological history of the Mindong dialect group was studied based on the data of the modern Mindong dialect group. As the title of the research project “Comprehensive Research” states, the research included microscopic phonological research at the lowest level, macroscopic phonological research with a view to the whole of the Min dialect phonological history, research using local rhyming books, and historical research on body parts words with the aim of integrating lexical history and phonological history. The original plan was to conduct a research on “Yanhua” distributed in Cixi City, Zhejiang Province, but due to various reasons, I was unable to do so. I also regret that I was unable to complete the first draft of our book, “Phonological history of the Mindong dialect group” within the research period.

研究分野：人文学

キーワード：中国語 びん東区方言 音韻史 語彙史 祖語再構 言語学

1. 研究開始当初の背景

従来の中国語方言音韻史は Bernhard Karlgren の *Études sur la phonologie chinoise* (1915-26) の影響が一貫して濃厚であり、現代諸方言と中古音の音類間の比較に終始し、中古音により何もかも解釈しようとする顕著な傾向をもっていた。

その一方、中古音を参照することなく各方言群それぞれの祖語を再構しようという方向性はワシントン大学・故 Jerry Norman 教授の閩祖語再構 (“Tonal Development in Min”, JCL 1-2, 1973 年等) を除くと、20 世紀にはほとんどあらわれなかった。

硬直したこの状況に変化が見られるのは、主として 21 世紀に入ってからのことである。印欧語族比較言語学を背景に、William Baxter 教授や South Coblin 教授らの欧米の学者が比較方法 (Comparative method) を駆使した中国語方言音韻史に着手する。私自身も 2003 年に『吳語処衢方言 (西北片) 古音構擬 (吳語処衢方言群西北方言群の祖語再構)』(好文出版、全 191 頁) を出版した。この流れは、徐々にではあるが中国語圏の研究者にも及ぶようになっていく。

2. 研究の目的

閩語閩東区方言群に属する中国浙江省 (1) 慈溪方言、(2) 泰順方言、(3) 蒼南方言、福建省 (4) 寿寧方言、(5) 福鼎方言、(6) 『班華字典』(初期の福安方言)、(7) 福安方言、(8) 寧徳方言祖語、(9) 霞浦方言、(10) 杉洋方言、(11) 屏南方言、(12) 大橋方言、(13) 閩清方言、(14) 『戚林八音』(初期の福州方言)、(15) 福州方言、(16) 福清方言の口語語彙データから抽出した音韻データを比較方法 (Comparative method) により分析し閩語閩東区方言群の祖語を再構するとともに、祖語から現代諸方言までの音韻変化過程を跡づける。『班華字典』や『戚林八音』等の文献資料やこれまでに再構した寧徳方言祖語のデータの活用により、中間段階の音韻体系再構も行い、より確度の高い音韻変化過程を推定する。研究期間終了時には、『閩東区方言音韻史研究』の初稿を完成させる。本書は、閩東区方言群音韻史の総括であるとともに、今後の展開が期待される沿海部閩語音韻史の基礎的研究でもある。

3. 研究の方法

16 種の各種方言データを、中古音を参照することなくもっぱら比較方法により分析し、閩語閩東区方言群の祖語を再構する。翻って、そこから現代諸方言までの音韻変化過程を跡づける。福州方言や福安方言など、地方韻書の存在する方言については、それらの文献資料も積極的に活用する。

4. 研究成果

微視的音韻史、巨視的音韻史、地方韻書の活用、語彙史との融合、以上 4 領域ごとに研究成果を報告する。

(1) 微視的音韻史に関する主な研究成果として 2 編の論文を紹介する。

① 「閩東泰順三魁方言中 ey 韻的来歴」(《声韻論叢》29、2022 年)

三魁方言における韻母 [ey] の来源として少なくとも *œ、*yœ、*iɔʔ、*uɔ、*uɔʔ、*uɔi の 6 韻母があげられる。これらの韻母 [ey] に合流していく過程を、三魁近辺の方言データをも参照しつつ、あとづけた。

② 「閩東区蒼南方言中発生的三種韻母鏈移音変」(『中国語学』270、2023 年)

蒼南方言は現代閩東区諸方言中のなかでもっとも特異な様相を呈した方言と言える。その大きな要因は、この方言に対する吳語甌江方言の強い影響にある。本論文では、このこと以外に蒼南方言が少なくとも 3 種類の drag chain を起こし、そのことも蒼南方言の特異な様相の一要因であると述べている。

(2) 巨視的音韻史に関する主な研究成果として 2 編の論文を紹介する。

① 「原始閩語中の舌叶塞音声母及其相關問題」(《語言学論叢》2022 年第 1 期)

閩語諸方言の比較研究により、閩祖語に *t 系声母、*tʃ 系声母と区別される *tʰ 系声母を再構した。閩東区方言には *tʰ 系声母を示す声母対応は観察されないが、“窗”(窓) と “戳”(突く) の韻母対応にその痕跡を見出すことができる。

② 「閩語中来自的来母字」(《辞書研究》2022年第2期、野原将揮との共著)

閩語には他の中国語方言の[l]に[t]や[d]が対応するケースがある。例えば「懶」は標準語ではlǎnであるが、閩東区福州方言では[tian⁶]と発音される。本論文では、このタイプの音韻対応が上古音における*m.r-と*ŋ.r-のような、複声母に遡ると論じた。

なお「原始閩語中上古*a類歌部字的表現」(*Bulletin of Chinese Linguistics* 16(2)、2023年、沈瑞清との共著)も同一領域の研究成果である。

(3) 地方韻書の活用した論文としては以下1編がある。

① 「《戚林八音》“遮同奇”初探」(《方言》2022年第2期陳澤平との共著)

《戚林八音》は今からおよそ300年前の福州方言を反映した地方韻書である。本論文ではその序文に見える「遮同奇」との注記が表す音韻史的意味を探索した。“遮”と“奇”の現代福州方言における韻母はともに[ia]である。本論文では、福州近辺の方言との比較研究等から、“奇”の韻母は元来*iaiであり、“遮”の*iaとは区別されていたが、《戚林八音》編纂時までには両者が同一韻母になっていたため、わざわざ「遮同奇(“遮”の韻母は“奇”の韻母と同じ)」とことわったと考えた。

(4) 語彙史と音韻史の融合は、研究期間中もっとも力を入れた領域であり、計4編を発表した(共著論文を含む)。ここでは以下2編を紹介する。

① 「閩東区方言中表示{屁股}的詞語」(《語言学論叢》63、2021年7月)

現代閩東区方言群における「尻」を意味する語を比較検討して、閩東区方言群の祖語形として“口穿”*ku³tʰuən¹を再構した。北部方言に現れる“口臀”*ku²tən²については、隣接する呉語の影響を受けた語形と考えた。なお本論文は《複印報刊資料 語言文字学》2022年第4期に転載された。

② 「閩東区方言的{眼睛}義詞及其相關的詞語」(《語文研究》2023年第4期)

現代閩東区方言群における「目」「目玉」「目やに」「涙」を比較検討し、それぞれの閩東区方言群の祖語形を再構した。それらは“目珠(目)”*muk⁸tʃiu¹~*m-t⁸tʃiu¹、“目珠仁(目玉)”*muk⁸tʃiu¹niŋ²~*m-t⁸tʃiu¹niŋ²、“目屎(目やに)”*muk⁸θai³、“目汁”*muk⁸tʃai³と再構される。

なお「閩語的{胎盤}義詞」(《本字、方言、語文學——漢語共時與歷時研究》、國立政治大學政大出版社、2021年)と「閩東区方言的{男陰}義詞及其相關的詞語」(《方言比較与吳語史研究——石汝傑教授榮休紀念論文集》上海：中西書局、2022年)も同一領域の研究成果である。

(5) まとめ

以上見てきたように、研究課題名にある「総合的研究」に合致した研究成果をだすことができたのではないと思う。本研究は同時に、閩東区方言音韻史の可能性を探る意味もあった。本研究で試みたさまざまな研究方法は他の閩語方言ひいては中国語諸方言全般にも応用ができるのではないと思う。

なお当初の研究計画では、浙江省慈溪市に分布する「燕話」の調査を実施することになっていたが、諸般の事情から実施することができなかった。また、研究期間内に著書『閩東区音韻史研究』の初稿を完成させることができなかったことを遺憾とする。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 6件/うち国際共著 6件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 陳澤平、秋谷裕幸	4. 巻 2022-2
2. 論文標題 《戚林八音》“遮同奇”初探	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 方言	6. 最初と最後の頁 137-142
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 秋谷裕幸	4. 巻 28
2. 論文標題 広東中山市隆都方言的歴史音韻特点及其帰属	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 声韻論叢	6. 最初と最後の頁 1-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 秋谷裕幸	4. 巻 269
2. 論文標題 原始びん東区方言的*yai 韻及其相關問題	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中国語学	6. 最初と最後の頁 76-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 秋谷裕幸	4. 巻 -
2. 論文標題 びん語的{胎盤}義詞	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 本字、方言、語文學 漢語共時與歷時研究	6. 最初と最後の頁 117-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 秋谷裕幸	4. 巻 63
2. 論文標題 びん東区方言中表示 { 屁股 } 的詞語	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語学論叢	6. 最初と最後の頁 96-115
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 秋谷裕幸、汪維輝、野原将揮	4. 巻 上册
2. 論文標題 説 { 狗 }	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 岩田礼教授栄休記念論文集	6. 最初と最後の頁 264-280
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5281/zenodo.6342364	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 秋谷裕幸	4. 巻 -
2. 論文標題 原始びん語中の舌葉音声母及其相關問題	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 言語学論叢	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 秋谷裕幸
2. 発表標題 びん東泰順方言中oy韻的来歴
3. 学会等名 第二十屆國際j i第四十屆全國聲韻學學術研討會 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 秋谷裕幸
2. 発表標題 びん東区蒼南方言中所發生三種lian移音变
3. 学会等名 日本中国語学会第72回全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 秋谷裕幸
2. 発表標題 広東中山市隆都方言の音韻特点及其帰属
3. 学会等名 第19屆國際jī第39屆全國聲韻學學術研討會（國際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 秋谷裕幸
2. 発表標題 論原始びん東区方言の*iai韻
3. 学会等名 日本中国語学会第71回全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 秋谷裕幸、野原将揮
2. 発表標題 びん語中來自*m.r和*ng.r的来母字 兼論原始びん語在漢語史上的位置
3. 学会等名 浙江大学文学院“語言学前言與漢語史研究講壇”（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<https://www.ehime-u.ac.jp/post-188678/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------